



Team Noah

MEDIA RELEASE

2021 年 9 月 23 日

OTOGONO KUNI

おとぎの国

HANKOOK
driving emotionSuper
Taikyū
Japanese Endurance Race

「おとぎの国 CIVIC TCR」 シリーズチャンピオンを獲得

PETRONAS
SYNTIUMDIXCEL
ADVANCED BRAKE TECHNOLOGYG72 SUPER COOLING
SYSTEM

スーパー耐久シリーズ 2021 Powered by Hankook に参戦する Team Noah の「おとぎの国 CIVIC TCR」は、9 月 18～19 日に鈴鹿サーキット(三重県)で開催されたシリーズ第 5 戦「SUZUKA S 耐」の ST-TCR クラスに参戦。3 戦連続のクラス 2 位ゴールとなったが、最終戦を待たずに今年のクラスチャンピオンを獲得。九州のレーシングチームチームが初の栄冠を手にした。

福岡に本拠を置く Team Noah(代表:清瀧雄二)は、“九州に元気を！九州のモータースポーツにもっとワクワクを！”を合言葉に九州のレーシングチームとして 2018 年より S 耐にフル参戦。昨年は新型コロナウイルスの影響で参戦を見合わせたが、今季は 2 年ぶりに復帰した。参戦車両は一昨年同様ホンダ・シビック TCR で、今回のドライバーはレギュラーの蘇武喜和と霜野誠友、富士 24 時間以来の芳賀邦行、一昨年岡山以来の和田慎吾という 4 名で臨んだ。ST-TCR クラスは今回も 2 台だけの出走で、全体では 9 つのクラスに 46 台がエントリー。鈴鹿は日本を代表する国際サーキットで、テクニカルな区間と高速区間が盛り込まれ、誰もが憧れるコース。昨シーズンはコロナ禍で開催が中止となったこともあり、どのチームも 2 年ぶりの開催を待ち遠しく準備した。

18 日の予選日は台風 14 号が九州から四国、紀伊半島を通過したために午前中のスケジュールはキャンセル。午後約 2 時間遅れで公式予選が行われた。予選は A、B ドライバー 2 名のベストタイム合算で争い、芳賀と蘇武のベストタイム合算の結果、総合 18 位、クラスポールポジションを獲得した。また霜野、和田も基準タイムを難なくクリアした。

19 日は台風一過の秋晴れとなり、午前中に気温も 30℃まで上昇し暑い一日となった。決勝前のウォームアップ走行で白煙を吐いて蘇武がピットイン。タービンプローが原因だったが、メカニックの迅速な作業で交換を終え、無事車両を決勝に間に合わせた。

11 時 34 分にグリーンシグナルが点灯し 5 時間耐久レースがスタート。ステアリングを握る霜野は ST-Z 車両を抑える走りをしていったが、3 周目のシケインで接触を受け加速が鈍った隙に続く 1 コーナーで 97 号車シビックに抜かれ 2 位にポジションを落とした。一時トップとの差は広がったがやがてその差を縮め、22 周目の 130R でかわしトップに返り咲いた。直後の 1 コーナーで 97 号車シビックのタイヤがバーストしコースアウトしたこともあり、霜野は早めの 25 周でピットインし芳賀に交代した。

芳賀はトップを守る走り続けていたが、交代後 30～40 分ほど経過した頃から ABS トラブルが起き、ブレーキングに問題を抱える走行となった。芳賀は 56 周でピットイン。ここで和田に交代した。2 位との差は 30 秒以上あり、和田もステディに周回を重ね 80 周でピットインして蘇武に交代。ピットのたびにフロントタイヤだけ交換とピット作業も迅速に進んだ。

蘇武はトップの 97 号車シビックとの距離を毎周 2 秒ほど縮める走りを見せ 40 秒以上あった差を 17 秒まで縮めたところで相手がピットイン。これでトップに立ち 1 分 10 秒の差をつけた。終盤の 104 周で蘇武は給油のためにピットイン。素早い作業でコースに戻ったがこれで逆転され 13 秒の差をつけられてしまった。追いかける蘇武だったが、終盤 119 周目にタイヤがバーストしたことで緊急ピットインを余儀なくされタイヤを交換したが、逆転はかなわずクラス 2 位でチェッカーを受けた。しかしこれで今季のシリーズチャンピオンを確定。九州のレーシングチームが最終戦を待たずにシリーズタイトルを獲得することになった。

第 6 戦(最終戦)は、11 月 13～14 日に岡山国際サーキット(岡山県)において 3 時間レースとして開催される。

芳賀邦行「途中から ABS にトラブルを抱えることになりましたが、最善は尽くせたのではないかと思います。チャンピオンは取れましたが、ライバルが開幕から出場していたらどういった戦いになったのかなと思います。最終戦は勝てるようサポートに回ります」

蘇武喜和「勝ってタイトルを取りたかったですね。できることはやれたのかなとは思いますが、タイヤに負担をかけたのでストレートでタイヤがバーストしてピットインすることになり、追い上げができませんでした。次はちゃんと優勝して締めくりたいです」

霜野誠友「一度抜かれましたが追いついて、前を走る 97 号車のタイヤがきついことは分かっていたし 130R までに抜くことができ、いいレースを見せられたと思います。最終戦は締めくくりのレースとしてきっちり勝って来年につなげたいですね」

和田慎吾「この高い路面温度のドライ路面は初めての走行だったのですが、自分のできることはやれたのかなと思います。もっとタイヤマネジメントができていれば結果も変わったのかもしれませんが。そこが悔しくて次の課題だと思います」